

寛子内親王

寛子内親王の名は六国史には見当たらない。しかしながら内親王の生母およびその出自をたどることが出来るので、実在した皇女と考えて差し支えないだろう。寛子内親王に関する記事は、次に挙げるものが全てである。

『皇代記』

(「皇女」の項に他の内親王たちと共に名前のみ列記)

『一代要記』

母大野鷹子從四位上直雄女。貞観十一年五月十四日薨。

『皇胤系図』

母。從四上大野(大原野、大原という異説も付記されている)真雄女。鷹子。

『帝王編年記』

母大野鷹子從四位上貞雄女

『本朝皇胤紹運録』

貞観十一一五十四日薨。母大原鷹子。從四上直雄女。

内親王の生母・鷹子の出自については、大野氏説、大原氏説、大原野氏説があることが分かる。しかし大原野氏は『新撰姓氏録』に見えず、大原氏に鷹子の父である真雄、直雄、貞雄、の名はない。大野氏は六国史に直雄という名が見え、從つて鷹子は大野氏の出身であつたと思われる。真雄、貞雄は誤写であろう。

大野氏は後の上野国山田郡大野郷を本拠としていた古代豪族である。天武十三年(六八四)に賜姓朝臣となつたことが『日本書紀』に見える。氏族の中で著名な人物としては、天武元年(六七二)の壬申の乱の際に近江将(天武天皇方)として活躍した大野果安、その果安の子で蝦夷征伐に功があり陸奥鎮守將軍・陸奥按察使を兼任した天平十二年(七四〇)の藤原広嗣の乱も平定した東人、天平宝字八年(七六四)の惠美押勝の乱に活躍する真本、陸奥国伊治城築城に功があつた石本など、軍事的職務に従事した人物が目につく。特に東人は參議從三位にまで上つており、奈良時代中期のこの頃が、大野氏の最も華やかな時期であつたと思われる。

鷹子の父・直雄は大同元年(八〇六)の桓武天皇崩御

に伴う葬儀の作路司に任命されたことを、正史における初見とする。大同三年(八〇八)には兵部大輔に任官され、その後弘仁年間に左近衛少將、左兵衛督、左京大夫、左近衛中将などを歴任した。軍事面で活躍した大野氏の名に違わぬ官歴と言えよう。弘仁九年(八一八)に七十六歳で卒去している。時に從四位上。この時代の大野氏としては、かなり有力な人物であつたろう。

鷹子には真鷹という兄弟がいる。この真鷹は正史には『続日本後紀』の承和十年(八四三)二月三日条の彼の卒伝以外は伝わらないのであるが、散位從四位下で世を去つた人物にもかかわらず、詳細な足跡が記されている。煩雑になるが全文を次に挙げておく。

散位從四位下勲七等大野朝臣真鷹卒。左近衛中将從四位上勲五等真雄之子也。弘仁元年任春宮坊主馬首。漸歷左兵衛右衛門少尉。十二年叙從五位下。至散位頭大監物左兵衛佐。淳和天皇踐祚。天長之初。任右近衛權少將。以旧臣也。尋授正五位下。轉中將。九年授從四位下。天皇脱。御閑之日。猶留真鷹身於公家。是歲(天長十年)冬十一月。供大嘗會。陣畢自櫛兵杖。贈与權中將藤原朝臣助。私退去隱于綴意第。介後不復出仕焉。真鷹難素無文学。且好鷹犬。而砥礪從公。夙夜匪懈。又平生抽割俸分。写經造像。不使人知。至齡迫。頓以供養薰修。令後家无追福之煩。父子武家。而同此行迹。觀者嘆息。惡我不如。

厥後被拜紀伊權守。未之國卒。時年六十二。

○内は本文脇書

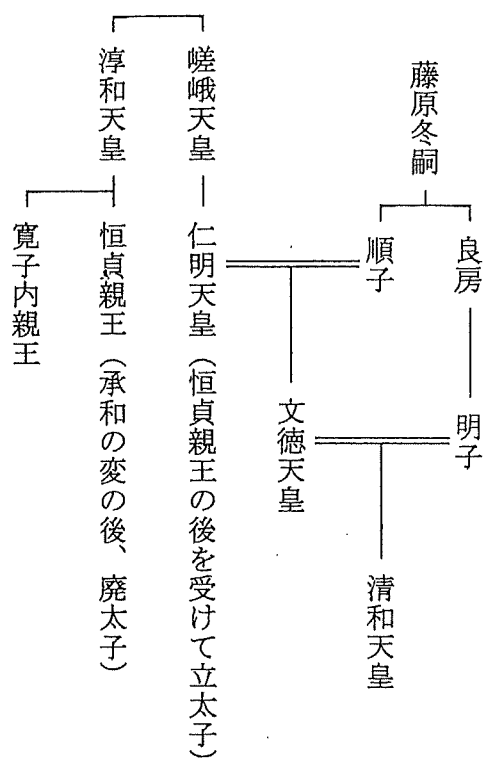
この卒伝によれば弘仁元年(八一〇)に春宮坊主馬首に任じられて以来、真鷹は一貫して淳和天皇に仕えたようである。即位の際の任官で「以旧臣也」と記されていることから、天皇の信頼が厚かつたことをうかがわせる。天長十年(八三三)の淳和退位後の大嘗會を機に職を辞して綴意第に退去した。「父子武家」と記されるように直雄同様武官を歴任した。教養ある洗練された貴族とは言いが難かつたようだが、その一方で密かに仏教修行に明け暮れてもいた。世間に敬意を払わせる一面もあつたようだ。

真鷹は出仕は止めても、上皇となつた淳和にそれまで同様に仕えて狩獵の供などを勤め、「厥後被拜紀伊權守」と記されていることから国司の補任は受けていることが分かる。『高野山官符』承和三年(八三六)七月二十七日に見える「從四位下行權守大野朝臣在京」というのも、名は欠いているものの真鷹である可能性が高い。

また真鷹が退去した綴意第というのは大野氏の本貫・莊園第と推定して良いのではないだろうか。綴意は宇治の南にある古来交通の要衝であり、現在の八幡市、城陽市にかかる辺りである。殿上の交わりから離れても京の近郊にあつて真鷹は何ら変わりなく、寛子内親王の後見を続けていたと思われる。

鷹子がいつ入内したかは不明であり、その可能性は延暦十九年（八〇〇）頃以降、天長七年（八三〇）頃までと、三十年もの幅が出てくる。延暦十九年というのは淳和が加冠したと想定される頃であり、天長七年は鷹子が直雄の最晩年の生まれと仮定した上での、彼女が成年に達したと想定される頃である。いずれにせよ鷹子にとつて天皇の旧臣と目される兄弟の真鷹は、頼もしい後見であつたに相違ない。

真鷹卒去後、寛子内親王を後見したのは誰であらうか。真鷹以降の大野氏としては鷹取が挙げられる。天安二年（八五八）の清和天皇即位の際に従五位下に叙せられたとき「大蔵大丞」、貞観九年（八六七）に石見守任官のとき「散位」だったと記されている人物である。それでも娘を清和後宮に入れていたらしく、寛子内親王薨去後のこととなるが貞観十五年（八七三）に定められた賜姓源氏四人の中に、大野氏腹の皇子・長淵の名が見える。その生母は「前石見守鷹取之女」であつた。もはや大野氏



清和天皇は藤原北家の中にすっかり抱え込まれている。寛子内親王は清和の曾祖父・嵯峨の姪という関係である。上、皇統の本流から外れている。清和も寛子も、互いに血縁や政治的關係を感じられないほど遠い存在だったと考へても間違ひではあるまい。そのため仮に内親王の薨去が奏上されても、朝廷がそれをなかつたこととして無視したのかも知れない。あるいは無視されることを見越して、最初から内親王家の方で正式な薨奏はしなかつたかも知れない。判然とはしないが正史における内親王薨伝の不在の理由は、この辺りにあるのではないだろうか。

は散位に甘んじる中流貴族に過ぎなくなつていたようである。天皇後宮に入内したということから鷹子と鷹取女は大野氏の中でも比較的家格が高い方だつたと想像され、また真鷹・鷹子と鷹取の名に同じ「鷹」の字が使われていることから、彼らの関係が遠くはないことが想定される。鷹取と真鷹、鷹子兄弟の關係は分らず、あくまで推測の域を出ないのではあるが、この三人は比較的近い血縁關係にあつたのではないだろうか。つまり、その墓去まで寛子内親王を後見をしていたのが大野鷹取だつたと考えることは、そう不自然なことではないと思われるのである。

通常、薨奏があれば天皇の廃朝、弔使の派遣がなされる。こうした一連の措置は記録として留められる性質のものである。そうした記事が正史編纂の際の記録の見落としによつて記載されなかった可能性も考えられなくはないであろうが、寛子内親王の場合は事情が異なるように思う。

●史料

寛子内親王
「母、大野鷹子（直雄女）」

帝王編年記

母。從四上大野眞雄〔ニヤ大原野イ大原イ〕女。鷹子。

皇胤系圖

皇女	氏子内親王	有子内親王	貞子内親王	寛子内
親王	崇子内親王	同子内親王	明子内親王	熟子從

四上為統朝臣。

皇代記

貞觀十一
五十四薨。
母大原鷹子。
從四上直雄女。

本朝皇胤紹運錄

母大野鷹子從四位上直雄女。貞觀十一年五月十四日薨去。

一代要記乙集